

重松 清 Kiyoshi Shigematsu 作家

しげまつきよし ●1963年岡山県生まれ。早稲田大学卒業。編集者・フリーライターを経て小説を書き始める。1999年「ナイフ」で坪田譲治文学賞。同年「エイジ」で山本周五郎賞。2001年「ビタミンF」で直木賞。さらに2010年には「十字架」で吉川英治文学賞を受賞した。鶴見俊輔氏との対談集「ぼくはこう生きている 君はどうか」では、時代の長いスパンで、日本人の人生と社会を考察している。

2010年の高校生の希望について考えるとき、僕は過去のほうへ想像力をめぐらせて、これまで語られた希望という言葉の意味を考えることから始めたいと思います。

例えば僕自身の高校時代。70年代後半、高度経済成長期は終わっていたけれど、まだ日本は「一億総中流」と浮かれています。しかし、その頃の高校生がみな前向きに、笑顔はつらつと、夢と希望にあふれていたかという、実はそんなことはないですね。

希望という言葉からは、つい笑顔で、太陽に向かって胸を張る「森田健作」みたいなイメージを思い浮かべがちですが、はたしてそれがすべてでしょうか。うつむいたら希望はないのか。太陽に背を向ける希望は、希望とは言わないのか。

希望というのは、けっして国家公認でもなければ、みんなが納得するような偉いものではない。もちろんそういうものがあるに越したことはないけれども、なくたって、希望はやはり人の心の中にたしかに存在するのだと、僕は思います。

村上春樹さんがよく書いているけれども、小さな、確実なる、幸せ——「小確幸」があれば、人は希望が持てる。うちの親父は大の阪神ファンで、チームが勝つたびにうまいビールを飲んで、次の日の仕事も頑張れた。その晩のナイトを楽しみに家に帰る親父の幸せを、希望と呼んではいけないのでしょうか。

幸せのネタはいくらあってもいい。ハードルを下げれば、いくらでも見つけれ

る。小さいけれどもそこに幸せがあるよと信じてあげないと、今の子どもたちは現実のなかでどんな希望があるのかが、見えなくなってしまうと思うんです。

進路指導の先生方にぜひ伝えたいのは、「希望」と「志望」を取り違えないでほしいということ。「志望」は、志をもって望むもので、ある程度立派な内容が求められるけれども、「希望」はまれにしかない望み。もっと小さなものでいいんです。「夢」と「希望」も少し違う。「夢」はいつか叶うもの、未来に属する言葉だけれど、「希望」は「今ここにあるもの」。人が気づかないようなささやかな世界に住んでいるものです。

「夢はいつか破れるかもしれない、志望は叶わないかもしれない、けれども希望は残る」というふうにしておいてあげないと、今の子どもたちは救われない。希望は、ある種の「セーフティ・ネット」なのです。

将来の仕事への希望。それを持つことは大切なことです。でも、全員がホワイトカラーのサラリーマンになる必要なんてない。『ガテン』という雑誌がこの言葉を広めてくれたおかげで、「俺は勉強は嫌いだけど、大工仕事が好きだ」って連中が「俺はガテン系だもん」って胸を張れるようになった。ホワイトカラーだけじゃない、もっとたくさんの価値観を示してあげることが今必要なのではないか。

僕もそう考えて、2008年に『おじい

ちゃんの大切な一日』という本を書きました。最先端のコンピュータ制御の工作機械も、最後のところではキサゲという道具を使って手で仕上げないといけないのができない。永年培った職人ワザの世界。その仕事一筋に会社を勤め上げて定年を迎えるおじいちゃんを、孫娘が訪ねるといのお話です。

機械メーカーの取材であらためて思ったのは、人間ってすごいんだよということ。サルにはできなかったものづくり、それが毎日進歩しているわけですから。

今の人は、「自分はすごい」という自己万能感だけはあるようだけれど、その前に「人間ってすごいんだ」という意識があったほうがいいと思う。その人間のつながりの、自分是一つなんだ。そう考えることが、様々な職業への敬意を育てる原点です。

希望というのは、スーパースターになることやアメリカンドリームを達成するところだけにあるんじゃない、工場のキサゲ加工一筋の職人さんにもある。その希望は、もしかしたら、仕事が終わった後に気の合う仲間と一緒に「お疲れ様を言い合えること、というささやかなものかもしれない。けれども、その愉しさを教えてあげることが、大人の務めでしょう。

誰にでも、ふつうのお父さんやお母さんや先生にも、小さな語り継いできた希望がある。それを一つでも多く子どもたちに見せてあげることの大切さを、今思います。



ささやかな世界に住むもの。 セーフティ・ネットとしての希望。

※「おじいちゃんの大切な一日」(幻冬舎制作)は、工作機械メーカー・牧野フライス製作所が「ものづくり」の大切さを伝えたいという思いから発行した絵本で、非売品。絵はまのゆが氏。巻末の読者はがきでお申し込みいただければ抽選で20校様に5冊まで贈呈いたします。